



琉球大学学術リポジトリ

University of the Ryukyus Repository

Title	この世の言葉
Author(s)	ホセ, マリア・メリーノ; 鈴木, 正士
Citation	琉球大学欧米文化論集 = Ryudai Review of Euro-American Studies(64): 105-120
Issue Date	2020-03-31
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/45529
Rights	

この世の言葉

ホセ・マリア・メリーノ著

鈴木正士訳

エドゥアルド・ソウト准教授が蒸発したとき、助教のセリーナ・バリエッホ以外、学科の誰ひとりとしてソウト准教授の安否を気遣ってはいないと、口さがない大学の連中は陰口をたたいた。なかでも辛辣なものたちは、そのセリーナ・バリエッホにしたところで、恩師への敬愛の念(もしかしたら恋愛感情)から心配しているのではない。彼女が悩んでいるのは、ソウト准教授が彼女の博士論文の指導教員だったからだ、と言った。実際、セリーナ・バリエッホは博士論文の指導者をなくしたばかりか、将来の研究職の望みも失ってしまった。そのため彼女は、長いあいだ落ち込んでいた。ところが突然、その事件に彼女は興味を示さなくなった。中断していた博士論文の指導をホセ・ドデーロ教授が引き受けたからだ。

しかし、ソウト准教授が蒸発してからの数週間、真相究明のため、セリーナ・バリエッホが奔走したのは事実である。

彼女は、治安警察の特務班の班長から直接話を聞くため、経費はすべて自分持ちで、ポルトガル国境近くのフィニステレ海岸までおもむいた。特務班ではすでに事件の調書が作成されていた。そのなかに、現場の状況から判断してソウト准教授は自殺したと見られると書かれてあるのを、彼女はとうとう探し当てた。

首をかしげるような不可解な言動が、大学の秋学期から、ソウト准教授には見られたが、そのあげく彼は蒸発したのであった。

彼の奇矯なふるまいは精神のバランスが崩れたからだ。そうなったのはドデーロ教授のせいだ、と噂好きなものたちは面白おかしく言い合った。

ドデーロという教授は、教授ひとりの学科体制を堅持することを望み、後輩の誰ひとり教授に昇任させようとはしなかった。むしろ、昇任人事がもちあがるたび妨害したり阻止したりした。そのため、教授の地位には到底つけないのだという苦いあきらめが、教員たちのあいだに広まった。しかし、ほかの学科や大学、たとえばマドリード大学でも、業績の少ない若い研究者たちがすでに教授に昇任していた。そこには後輩の活躍ぶりや高い知名度をやっかむ教授がいなかったからだ。

ソウト准教授の場合、あきらかに彼は不当なあつかいを受けていた。大学に19年間勤務し、7年前に博士号を取得、6年前に准教授となり、ドデーロ教授に次ぐ地位にあった。そのうえ、専門家のあいだでも高く評価される数多くの著作を刊行していた。にもかかわらず、同世代の教員のうち教授に昇任していないのは、彼だけであった。自分が退職する10年後まで本学科に教授はひとりでけっこう、とドデーロ教授は事あるごとに言っていたからである。

そのため、ソウト准教授の仲間たちは、しじゅう彼に他大学へ移ることをすすめた。事情が事情だから異動もやむを得なかったし、彼の能力を考えたら、どこの大学でも教授として迎えてくれたであろう。彼は独身だったので、異動のおりに生じる問題としては適当な住まいをさがすことくらいで、ほかになんら不都合な点はなかった。

しかし、ソウト准教授は柔軟性に欠ける人物であった。長年の大学勤めですっかり馴染んだ現在のライフスタイルを変えることは、彼には至難^{わざ}の業であった。

ソウト准教授は、ティルソ・デ・モリーナ駅近くの大きな古いマンションの一室に暮らしていた。そこは彼にはとりわけ居心地が良かった。8000冊もの蔵書を並べても、部屋にはまだゆとりがあったからだ。同じ条件の部屋がまた見つかるとは、彼にはどうしても思えなかった。

大学を移って教授になったらいいというアドバイスには耳をかさず、その一方で、教授になれない恨みはますますつのり、ソウト准教授の精神のバランスは崩れていったのだ。

以上が、ソウト准教授変調に関する大方の見方であった。

ソウトが初めて変調^{きた}を采したのは11月、新しい学年がはじまった日のことであった。まだ講義はスタートしてはいなかった。そのため彼は、音韻論に関するレポートにかかりっきりで、音素の差異について、詳細な一覧表を作成していた。

にもかかわらず、彼は新学期に催される連続学術講演会の実行委員長だったので、その日予定どおりホールに行き、経済史専門の教授による「伝統的農業の終焉^{しゅうえん}」と題する講演を聞いた。

その講演を聞いているあいだも、研究中のテーマがソウトの頭から離れなかった。当時彼は、とくにbとdとgの音素に興味を持ち、通説とは異なる視点からそれらの音素を分析していた。そのため、経済史の教授が発音する言葉の音素の差異を聞きもらすまいと、ソウトは熱心に講演に耳をかたむけた。

その時、ソウトはそれまで体験したことのなかった奇妙な感覚をおぼえた。

これは、当のソウトが語った体験談だ。

明瞭に聞こえていた講演の言葉のいくつかが、突然、意味を失った、というのである。奇妙なことに単語が解体して聞こえ、意味を理解できなくなった。そのため彼は、前後の言葉から辛うじて内容を把握したのだった。

その現象は、まず^{ガナデリーア}牧畜という単語で生じた。ガナデリーアという言葉は何度も聞いているうち、ソウトの耳に、ガ・ナ・デ・リ・アと分割して聞こえだし、最終的にそれは、不明瞭な音素の連続でしかなくなった。母音のア、エ、イだけが突出していた。そして、それらの母音のあいだで、本来言葉に意味を与えるはずの軟口蓋音と鼻音と歯茎音の子音が、分離することなく混ざり合っていた。

^{クルティーボ ピアス・アグロベクアーリアス}耕作地や農業牧畜道路といった単語にも同じ現象が生じた。そんなことがそれ以上起こらないよう、ソウトは神経を集中させて講演を聞き、教授が話しているあいだ、単語一語一語を聞き洩らすまいと耳をこらした。繰り返される音素にしたがってほしいの意味を予測すると、音のつながりが途切れないうちに、素早く単語の意味を判断した。

ソウトはひどく不安になった。しかし悪いことに、その現象は講義がスタートしたとき、ふたたび生じた。学生の質問の内容が理解できなっただけでは

ない。耳にする単語がますます形を成さなくなったのである。

学生たちは、ソウトの変調にはじめ驚いたが、次第におもしろがり、ソウトをからかうようになった。12月になるとすぐに冬休みに入ったが、例年この時期、学生はもう勉強する気をなくしていると憤慨するソウトも、今年は講義が終わったことに安堵をおぼえた。

ソウトの異変を同僚や友人が知ったのは、そのころのことである。自分ひとりの胸におさめることができなくなったソウトが、彼らに告白したのだ。すでに事態は進み、日常会話もままならなくなっていた。「こんにちは」もソウトには混ぜこぜの音に聞こえ、まったく理解できなかった。耳から入る言葉を理解するため、紙に書いてもらうことが必要になった。ソウトにとって曖昧さも混乱も誤謬もない明確な意味をもつものは、書かれた文字だけであった。

ソウトの異変は話し方にも徐々にあらわれた。^{ろうしや}。聾者のように声が大きくなり、自信の無さから言葉尻に調子はずれの音が、まるで吹き流しの布切れのようについで出た。

必要最小限のことだけしか話さないとソウトは決め、主な会話はノートに書いてすませた。ソウトの心に響く言葉は、ソウトが語りだしたとき、もはや意味を成さない音の集積になっていたからだ。そのためソウトは、つねにノートを持ち歩き、尋ねたいことがあればひとに書いてしめし、尋ねてくるものには書いて答えた。

セリーナ・バリエッホは、ソウトのノートを何冊か持っている。ひととのコミュニケーションのために利用していたそのノートに、ソウトは折々の思いを記していた。それを読むと、彼の精神面での深刻な変調ぶりがよくわかった。

新年、ソウトは気を取り直して講義にのぞんだが、大混乱を来し、まったく授業にならなかった。学生の言うことがソウトにはわからなかったし、学生たちにもソウトの言っていることが理解できなかった。

青ざめたソウトが病院に駆け込めると、診断した医師はソウトに、即刻職場から離れるようにと言った。そして、少なくとも2か月のあいだ、どこか静かな

田舎で療養するようすすめた。

そこでソウトは、人里離れた山間やまあいののどかな村を見つけると、机に向かうかわりに1日の大半を散策に費やした。ソウトが泊まっていた宿屋は下宿屋も兼ねており、獣医の男と2人の小学校の女教師が暮らしていたが、彼らはソウトに対し敬意を込めて接した。

しかし、おだやかな風景も敬ってくれる村人の存在も、ソウトの病気を快方に向かわせることはなかった。むしろ逆に、病状は抜き差しならない状態にいたった。

変調は精神にまでおよびはじめたのである。

セリーナ・バリエツホが保管している、ソウトが彼女に宛てた手紙に、彼が体験したおそろしい現象が記されている。それは山を流れる小川のせせらぎが人間の話す言葉のように彼に聞こえたというものだ。人間の口から発せられる言葉が理解できなくなったとき、自然の発するいくつかの音も人間の言葉のようにソウトには聞こえはじめ、そして、次第に音素が分割し、理解できなくなった、というのである。

容認できるものではないが、小川のせせらぎも、科学的分析可能な言語規則のつとに則っているのだろうか？ それとも、人間の言葉は自然音の範疇はんちゆうにあり、小川のせせらぎのように意味を欠いているのだろうか？ 怖くてたまらないが、つい、いろいろ考えてしまう、とソウトは手紙の中に記し、そのあと、彼独自の説を展開していた。その説はセリーナ・バリエツホを仰天させた。それは狂気の兆した精神からしか生じない考えだったからだ。

人間の言葉も自然の音も理解できない不安な世界に閉じ込められたソウトは、手紙に、こう綴っていた。

人類が創造した最初の道具である言葉とは、意思を伝え合うためのものであり、記憶しようとする尽きることのない懸命の努力によってしか存続できない。そして、人類が言葉をあやつるようになって以来、記憶する努力という営為は、朽ちることなく心のひだに深く刻みつけられている。しかし、無自覚なこの努力を怠ったり突然記憶を失ったりすると、精巧に組み

立てられた言葉という虚構の大伽藍はきわどいバランスを失い、崩壊してしまうのだ。この現象こそが、まちがいなく、今自分の身に起こっていることだ。

ソウトは、心のひだに刻みつけられていた記憶する努力を忘れ、さらに、泉の湧き出る音や雷鳴のとどろく音や車のエンジンのうなる音のような、人間の発する以外の音も聞き取ることができなくなっていた。

セリーナ・バリエッホが持っているソウトのもう一通の手紙には、彼を苦しめた変調の深刻さがさらに明確になっていた。

ソウトは次のように書いていた。

書き言葉も、意識下の強い意志の産物であるに違いない。形では表せない意味を文字が持っているという集団的幻想が、各自の精神に共有されているからだ。文字によって人々に認知される名称を持つとき、それは世界に存在する事物の記号であるというだけでなく、それらの事物を存在させる魔法の表徴となるのである。

「書き言葉は事物が存在するための唯一の印である」とソウトは書いていた。「事物は文字によってのみ存立できる」「名前を持った事物のみが存在する」「言葉とは世界だ」

これらの手紙の内容に驚愕したセリーナ・バリエッホは、ソウトに直接会うため、彼の滞在する山間の村まで車を走らせた。雨の降る5月のある日のことだった。ひとつの傘に入った2人は、花が咲き乱れる森をゆっくりと散策した。

そのときの雨のしずくで、ノート5、6ページにわたって交わされた彼との会話がにじんでいる。

そこに、ソウトは常軌を逸した彼の考えを表した。

「存在するのは書き言葉だけだ」「音素とは流れる水」

そして、別れぎわに、彼の知性が取り返しのつかないほど欠落していることを示す、病的な次の一文を、ソウトは記した。

「文字を忘れるな。さもないと、すべて消滅する」

ある日突然、ソウトは誰にも告げず、山間の村から飛び出すと、我が家に戻った。このことを最初に知ったのは、またしても、その数日後たまたま彼のいた宿屋に電話をかけたセリーナ・バリエッホだった。そこで彼女は、ソウトのマンションを訪ねてみることにした。彼女が何度もしつこく玄関のブザーを押すと、やっと彼はドアを開けた。

ソウトは整理整頓を習慣とする人物であった。また、身だしなみには日頃から注意をはらっていた。ところが、セリーナ・バリエッホがなかに入ると、家具はあるべき位置からずれ、いたるところ本が散らばっていた。そして、無精ひげをはやしたしわくちャのパジャマ姿のソウトが、おびえたようなまなざしで、彼女をじっと見つめていた。

膨大な蔵書を保管する書庫としてソウトが利用していた、家のなかで一番広い部屋の床には、彼の手書きの紙がばらまかれ、足の踏み場もなかった。セリーナ・バリエッホは、机の上にあったノートを取り、なにも書かれていないページを見つけると、「お元気でしたか？」と書いた。しかしソウトは、答えようとする素振りさえ見せなかった。彼女の目の前で突っ立ったまま、彼女をぼんやりと眺めていた。セリーナ・バリエッホがのちに信頼できるひとに語ったところによると、ソウトのその時の様子に、彼女は憐憫とも恐怖ともつかない複雑な思いを抱いた。

ソウトは、^{しょうすい}憔悴した様子で、ソファにドスンと腰を落とした。セリーナ・バリエッホはソウトに、ノートとペンを渡す仕草をしたが、しばらくそれを受け取ろうとしなかった。彼がやっと文字を書きはじめたとき、彼の変調はまた新たな局面を迎えていることに、セリーナ・バリエッホは気がついた。ソウトはいつものようにすらすらと達筆な文字を書く代わりに、もたもたとゆっくりペンを動かしたからだ。その姿は、まるで習いたての文字を一所懸命になぞる小学生のようであった。

ようやくソウトは、形が崩れ線が激しく波打っている文字を連ねて、こう記した。「ひどく疲れる」。そして、まるで意識を集中し気を奮い立たせるかのように、しばらく宙を見つめていたが、ふたたびノートに向かうと、やっと次の文章を書き上げた。

「文字を忘れた。もうおしまいだ」

セリーナ・バリエッホはいたたまれない気持ちになった。

それから数日後、ソウトは書置きも残さずいなくなった。そして1か月後、不可解な事件が起こった。終焉海岸という異名を持つポルトガル国境近くのフィニステレ海岸のはずれで、ソウトの乗用車が発見されたが、車のなかには彼の衣類や所持品があるだけで、ソウト本人は見つからなかったのである。

ソウトはここ数か月突飛な言動をとっていたという事実をつかむと、警察は、ソウト蒸発の容疑者はソウト自身であると断定した。遺体はまだ発見されていなかったが、おそらく、ソウトは大西洋の荒海に身を投げたのではないかと考えたのである。

ソウトが自殺したとは、セリーナ・バリエッホには到底納得がいかなかった。そこで、長旅も厭わず、ただちに、フィニステレ海岸のある北部の州、ガリシアへ車を走らせた。警察での面倒なくつもの手続きを経て、彼女はやっとソウトのノートを取り戻すことができた。しかし、彼の財布やガソリンの小切手や、ビニール袋に入ったくしゃくしゃに丸められた衣類の引き取りには、さらに煩雑な手続きを踏まなければならなかった。

セリーナ・バリエッホは、ソウトの車の発見場所を自分の目で確かめておきたかった。そこまでの案内役をソウトが泊まっていた宿屋の息子が引き受けた。あどけなさの残る赤ら顔のこの若者は、岸壁を縫うようにして走るセリーナ・バリエッホの車の中で、舗装されていないその道でこれまでに起きた事故について、ひとつひとつ詳細に説明した。

海は、白い波頭を見せながら激しくうねっていた。逆巻く波は、ごつごつした鈍色の岩と岩とのあいだになだれ込むと、その瞬間、しぶきとなって日にきらめいた。

セリーナ・バリエッホは宿屋の息子に指示された場所に車を止めた。彼が無言で指さすタイヤの跡は、濡れた砂の上にくっきりと、まだ消えずにあった。

道から先は草の生えている緩やかな下り坂だったが、すぐに急峻な斜面に変わると、人骨のような白っぽい丸みのある石ころの勾配が海まで長くつづいた。

海辺には怒涛^{どとう}が押し寄せていた。

セリーナ・バリエッホは、荒々しい海や、海のなかから突き出たナイフのようなくつもの岩や、鉛色の雲に覆われた水平線を、いつまでも眺めていた。それは、人間をかたくなに拒絶する風景だった。白い小石や黒い岩礁のような動かないものも、轟^{とどろ}く波のような一瞬一瞬変化するものも、錯乱状態の極みとしか言いようがなかった、とセリーナ・バリエッホは、のちに友人に語った。

その場所で、セリーナ・バリエッホはソウトのノートに目を通した。3冊あるうち2冊は未使用だったが、残りの1冊には、文字がびっしりと並んでいた。それは最近書かれたものにちがいがなかった。最初の数ページに、この海岸までの移動中ソウトが自分の意思を伝えるために記したと思われる言葉が、いくつも見られたからだ。「ハイオクガソリン、2000ペセタ」「魚スープとステーキのじゃがいも添え」「ビール小瓶1本」「もう1本」「トイレはどこ?」「コーヒーと砂糖」のような語句が、子供が綴ったような稚拙な文字で表記されていた。明瞭で均整のとれたソウトの筆跡は見ると影もなかった。

意思疎通のための、それらの語句が並んでいたのは、最初の3、4ページだけだった。そのあと何ページにもわたり、まるでアルファベットの練習のように、途切れることなく下手な綴りで、aからzまでの文字が繰り返し^{きちょうめん}几帳面に記されていた。

次にセリーナ・バリエッホが目にしたのは、不器用な写字生のようにソウトが書きなぐっていた、音節や音韻交代の文字列だった。それは、昔の教科書でよく見た、ペン習字のお手本のようだった。「ロ、ラ、アラ、オラ、ソロ」「ソ、
サ、オサ、ソソ」「ラ^(つばさ) ロサ、ラ^(波) フォサ」「リヤ、リヨ、ヤ、ヨ」「リ^(ひとり)エーボ
^(離熊) ^(まずい) ^(墓石) ^(墓穴)
ラ^(を) リヤベ」「ア^(輪)ロ、フ^(灯台)アロ、オ^(黄金)ロ」「マ^(手)ノ ド^(痛む)ロリーダ」「ラ^(光輝く)ヨ ル^(黄金の)ミノサ」
「ア^(砂)レーナ ド^(黄金の)ラーダ」

ノートにはそれから、ソウトの抱いていた考えが表されていた。それはセリーナ・バリエッホに、雨の降る5月のあの日、山里でソウトが書いた、戯言^{たわごと}のような文章を思い出させた。「存在するのは書き言葉だけだ」「名前をもつものだけが存在する」「この世にある文字を忘れるな」「忘却とは存在しないということ」「わたしは忘却する。つまりわたしは存在しない」

形の崩れた大きな文字で書かれたそれらの語句のあと、ソウトのメモは大詰
めを迎えた。それは、セリーナ・バリエッホの判断するところ、彼女が今対峙^{たいじ}
している大西洋の荒波を前にして書かれたようだった。海岸で目にすることの
できるものが、ノートに並んでいたからだ。「海」「波」「岩」「小石」「砂」「青」
「灰色」「光」「影」「夕暮れ」「金星」

羅列した単語によってソウトは、彼がこの場所で過ごした一時^{いつとき}一時^{いつとき}の時間
について詳細な一覧表を作成していたのだ。彼はここで一夜を過ごしたにちが
ない。語句は、「木」「草」「藪」「煙」「鷗」「響き」「きらめき」「きしむ荷車」「う
ろつく犬」「うなる波」「またたく灯台」「遠くの火」「広い浜辺」「夜明け」「満
ち潮」とつづいていたからである。

それらは、ノート22ページにもわたって綴られていたが、徐々に文字の歪
みは目立っていき、形が崩れ、ついには、文字としての体^{てい}を成す最後の一線を
決定的に乗り越えてしまっていた。それでもソウトは、文字とは思えない代物
を書き続けていた。どのページにも、彼は最初、らせん状の線を何本も下に引
張っていた。得体の知れない不格好なそれらの線は、文字特有の線状をなんと
か保っていたが、そのあと、散り散りの点に変わり、それが次第に長くなると、
最後は、1本のもつれた線になった。ページの中心部からはじまるその線は、
のたくったかと思うと、伸びやかになり、あちらこちらに向かい、まるでクモ
の巣の素描のようだった。

あとのページは空白だった。

その日の午後、治安警察本部で、セリーナ・バリエッホは特務班の班長から
話を聞くことができた。班長は、背の低い小太りの男で、特徴のある話し方
から、どこか遠い地方の出身者だということが知れた。

彼は漁師の通報によって出動した警官のひとりで、大西洋に突き出た海岸の
はずれで捨てられたように駐車していた車を、現場検証した。

車はおよそ1週間、車体を少し傾けた状態で、道路脇に放置されていた。

助手席には、ノートや2000ペセタ入った財布や小銭やティッシュペーパー
の箱やガソリン購入用の小切手帳が乗っていた。一方、ドライバー席には、衣

類が残されていた。その時、特務班の班長は、衣類の在り^{あり}様^{よう}に違和感を覚えた。しかし、彼はいつもと変わらず、感情を顔に出さないようにした。

彼には、調書をまとめるに際し、強い職業意識があった。事件をありのままに映し出すことと、データをできるかぎり正確に伝えることを旨^{むね}としていた。そのため、シート上の衣類についても、詳細に記述するようところがけた。

調書にかかりはじめたとき、衣類の置き方に不思議な秩序があるのを彼は発見した。

まず靴は、シートの下に、左側に左の靴、右側に右の靴というように、履いていた足の位置のまま、並べてあった。靴ひもはしっかり結ばれていた。靴下の先は、靴のつま先まで入っており、ゴムの部分はズボンの裾にさしこまれていた。

ズボンのファスナーは閉じ、ベルトも締まっていた。はいているときの恰好のまま置かれたそのズボンのなかには、トランクスがあった。そして、ボタンのはまったワイシャツが、シートの背もたれにもたれるようになり、腰から下の部分はズボンに押しこまれていた。ワイシャツの首元からは、プレートのついた銀の鎖がのぞいていた。それはソウトが普段首から下げていたもので、プレートには彼の氏名や血液型が刻まれていた。

まるで身につけているかのように置かれたそれらの衣類は、着ている者もいなければ立体感もなかったにもかかわらず、そこには、ひとの気配がぼんやりと漂っていた。死を喚起するブラックユーモアの仕掛けのようだった。身元不明者による不幸な決意の表明かもしれない、と特務班の班長は思った。

衣類の配置に関する不可解な記述を調書のなかで読んだとき、セリーナ・バリェッホは漠然とした恐怖を感じた。のちに親しい何人かの友人に語ったが(彼女の話を理解するのに友人たちは時間を要した)、その時、ソウトが言い残した言葉を、セリーナ・バリェッホは突然思い出し、彼が唐突に消えていく映像が彼女の脳裏に浮かんだのだった。

「文字を忘れるな。さもないとすべて消滅する」

ソウトの記憶から最後の言葉が消滅し根絶したように、ソウト自身も宙に消

えてしまう。すると、主^{あるじ}を無くした衣類は、ゆっくりと委縮し、シートにもたれかかる。信じがたいことだが、これこそがソウト蒸発の真相なのだ、とセリーナ・バリエッホは思った。

しかし、それはあまりにも馬鹿げた解釈であった。彼女は、狂気ともいえるその考えを脳裏から直ちに追い払おうと、頭を軽く振った。

たしかにエドゥアルド・ソウト准教授の蒸発は、セリーナ・バリエッホ助教の心に重くのしかかった。しかし半年近くたったころ、彼女は立ち直り、研究意欲も湧いてきた。今ではセリーナ・バリエッホ助教は、ホセ・ドデーロ教授のもと博士論文執筆に熱心に取り組んでいる。

解説

数学者の藤原正彦のエッセイ『遙かなるケンブリッジ』には、藤原氏がイギリスのケンブリッジ大学で出会った個性的な性格の研究者のエピソードが数多く登場する。ホテルに泊まる時、必ずバスタオルですべての鏡をおおう癖のある教授。独身の高名な老教授は、ボートに女性と2人きりで乗せられるが、終始無言のまま彼女と10センチ以上の距離を保とうと妙な格好で身体を強ばらせる。また、過度ともいえる研究のため神経衰弱を何度か経験した教授は、車の運転中何かに集中していたらしく単純な運転ミスで命を落とす。

大学の研究者に風変わりな人物が多いのはイギリスだけとはいえない。世界中どこの大学でも同じなのかもしれない。スペインも例外ではないようだ。本作品の主人公エドゥアルド・ソウト准教授もずいぶん個性的な人物である。

研究熱心で業績の多いソウト准教授は、先輩教授の嫌がらせのため教授に昇任できない。かといって他大学へ異動しようとしめない。というのも、彼は独身で身軽な境遇にもかかわらず、8000冊の蔵書を置けるマンションが他の町では見つからないと考えるからだ。

ソウトは立派な学者ではあるものの、いささか風変わりな人物なのである。

しかし、ある日ソウトの身に、風変わりという言葉ではくくれない、病的な現象が起こる。

突然、彼には単語が解体されて聞こえはじめ、ソウトは日常会話やあいさつすらままならなくなる。コミュニケーションは文字だけに頼るようになり、ノートを持ち歩き、人に書いて示す。精神にまで変調を来たし、小川のせせらぎのような自然の音が人間の声のように聞こえるようになるが、その音も彼には分割して聞こえ理解不能となる。ソウトは思索をめぐらし、言葉があるから世界は存在すると考え、文字を忘れるとすべては消滅するという結論にいたる。そしてとうとう、言葉を失い文字も書けなくなったソウトは、この世から蒸発してしまった(かもしれない)のである。

本作品は、人間にとって言葉とは何かを問うた作品といえるだろう。

言葉は人間の思いを表現したり、他人に自分の思いを伝えたりするための道

具であるばかりではない。考える葦である人間は言葉を用いて思考するという点で、言葉とは人間そのものなのではないか、と作者は問いかけているのである。

そのような哲学的な問いかけを、作者のホセ・マリア・メリーノは生真面目にはおこなわない。彼の作品は物語性が高く、虚構の卓抜さは読者を作品世界に惹きつけ、楽しませ、飽きさせない。写実を第一とする伝統のスペイン文学には珍しく、彼は、現実のなかに幻想的な出来事を描くことで、独特のリアリティーを獲得しているのである。

後輩の教授昇任をはばむ教授や将来の研究職に強い色気を示す大学院生などが棲息する研究者の世界という、実際にありそうな状況やそこにいそうな人物を、まずホセ・マリア・メリーノは設定する。大学の先生を敬う素朴な村人や正確な調書を書くことを旨とする地方の刑事や気が利くようで少し常識知らずの宿屋の息子なども、いかにも現実に出くわしそうな人物たちである。このような現実世界に即した人物や状況が積み重ねられるなかで、ソウトの身に起きている常軌を逸した病的な現象が語られ、最後に、ソウト蒸発という不可解な事件が突発する。

何が起こったのか？ ソウトはほんとうに宙に消えたのか？ 真実は何なのか？ 読者は思考停止の状態となり、回答が与えられないまま置き去りにされる。そして、助教のセリーナ・バリエッホの新たな研究生生活のスタートが伝えられ、『この世の言葉』は幕を閉じる。

ソウト蒸発後落ち込んでいたセリーナ・バリエッホが新しい指導教授のもと元気に博士論文執筆に励む現金な様子は、ドン・キホーテが死んでさんざん泣いたあと、彼から財産を分けてもらったことを知って喜ぶサンチョを思い起こさせる。滑稽感もありながら、それは現実の確かな一端であり、読者は重力ある現実世界に引き戻されるのである。

にもかかわらず、本を閉じたあとも読者は、ソウトの身体が消えてなくなるという荒唐無稽な事件は、現実にこの世に起こった出来事かもしれないと、くりかえし考えることになるのである。

研究に没頭し狂人じみて言葉を失い、この世から消滅するソウトという人物は、騎士道物語を読みすぎたために現実と物語の境界線を失い最後に昇天する、狂気の騎士ドン・キホーテを髣髴させる。ソウトはドン・キホーテのパロディー的存在のように思える。実際、本作品には『記号とメッセージ』という続編があるのだが、その続編には、ソウトがマドリードのスペイン広場に立つドン・キホーテ像を凝視するという、彼がもうひとりのドン・キホーテであることが示唆される場面が見られるのである。(ソウトは蒸発していなかったのだ)。

ソウトが登場するのは本作品と続編だけではない。風変わりな個性であるために多くの読者の興味と関心と呼んだようで、彼はさらに多くの作品に登場し、それはいわば、ソウトシリーズを成している。それらの作品をまとめたアンソロジーが、*Aventuras e invenciones del profesor Souto* と題され、マドリードの出版社 Páginas de espuma 社から2017年出版された。

わたしにその本の存在を教えるばかりか本まで送ってくれたのは、作者のホセ・マリア・メリーノ本人である。

10年ほど前、彼の作品をはじめて訳したとき、辞書にも出ていない単語や理解しにくい表現に難儀し、直接作者に訊けないものかと、ダメでもともと、巻末に記されていた出版社のアドレスに相談のメールをわたしは送った。すると、すぐに出版社の社主から、ホセ・マリア・メリーノのアドレスが記された返事が届いた。喜び半分驚き半分で、教えてくれたアドレスにメールを送ると、わたしの質問に丁寧に答えるメールをホセ・マリア・メリーノは送り返してくれたのだ。それ以来、彼とはメールをやり取りする仲となった。本作品を読んでいたとき、ソウトという人物像はたいへん興味深いと書き送ったところ、それならこの本をプレゼントしようと、彼はサインと直筆のイラストが描かれた上記の本 *Souto* をわたしに送ってくれたのである。

ホセ・マリア・メリーノは、1941年スペイン北西部の自治州ガリシアの港町ア・コルーニャに生まれ、幼い頃、隣接する州カスティーリャ・レオンの古都レオンに移り住んだ。(そのため、彼の作品の舞台はレオンか、現在の住まいのある首都マドリードであることが多い。本作の場合、マドリードが主な舞

台となっている)。

マドリードで法学を学んだのち、彼は1972年詩人としてデビューした。*Novela de Andrés Choz* (1976) 以来、小説家としてこれまで多数の作品を発表している。*La orilla oscura* (1985)、*El centro del aire* (1991)、*Las visiones de Lucrecia* (1996)、*Los invisibles* (2000)、*El heredero* (2003)、*La sima* (2009) などである。ミゲル・テリーベス文学賞 (1996) やラモン・ゴメス・デ・ラ・セルナ文学賞 (2004) など受賞した文学賞は数多い。2008年、スペイン王立アカデミーの会員に選出された。さらに2013年、*El río del Edén* (2012) で国民文学賞を受賞した。

2017年6月、ホセ・マリア・メリーノは、セルバンテス文化センター東京の招きで来日し、「スペイン文学のパノラマ」と題する講演をおこなった。そこでわたしは初めて彼に会い、短い時間ではあったが言葉を交わすことができた。

その折彼にも伝えたが、わたしはホセ・マリア・メリーノの作品をすでにいくつか訳しており、日本に暮らす多くの人に彼の小説の面白さを味わってもらいたいと考え、一冊の書籍として出版できないものかと (ホセ・マリア・メリーノもそれを望んでいる) 目下奔走しているところである。

ここに訳出したのは、José María Merino 著、*El anillo judío y otros cuentos*, Castilla, Valladolid, 2005 所収の短編 13 編中の 1 編 “Las palabras del mundo” である。